

猿新聞

編集・発行
山村 準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp

棲み分けを考える

追い払いでは解決しない！

なぜ、野生動物が人里に出没するようになったのでしょうか。

今、中山間地域は高齢化、過疎化が急速に進み野生動物に対する抵抗力が極端に減少しています。

棲み分けの緩衝地帯であった里山は、放置され荒廃し、それに加え獣害による耕作放棄地が増加し、野生動物の生息域を広げています。

これからは、追い払や柵ばかりでなく、自然の摂理にかなった、野生動物との棲み分けを真剣に考えなければなりません。

棲み分けを徹底させていくためには、

平成になる前頃までは、名張付近の野生サルが生息地は香落溪付近一帯で他では殆ど見かけることはありませんでした。

香落溪一帯は自然の恵みが豊かでサル達の格好の棲み家となっていて、人里へは決して下りてくる事はなく、棲み分けが確立していました。

然し、近頃では棲み分が崩壊し頻繁に集落へ入込み果樹や畑の野菜類を荒らしまくり、最初は人を見るに逃げておりましたが、最近では逆にサルの方が威嚇するまでの事態が起こっています。

これには、山林開発による自然林の減少や観光・宅地造成による野生動物生息域への人間の立ち入り、高齢化・過疎化による中山間農業の衰退。等々複合的な環境変化が考えられます。



獣害駆除として捕殺された野生動物は、過去に類を見ない多数に及んでいます。

○生息地や周辺の環境管理は適切か？



要因がからみあつて起こっていると思います。棲み分けを考える時、どの要因がどのように影響しているかを、十分検討する必要があります。

○被害対策は行き届いているか？

被害を放置していると、作物の味を覚え、人慣れが進み行動がエスカレートしていきます。

集落での野生動物を誘因する要素を全て排除し、人里を「怖いところ」「魅力の無い」所にするのが先決です。

○個体数管理は適切か？

個体数が増えれば、被害も増大します。逆に減りすぎると絶滅につながります。

一つの手法として、緩衝帯整備（バッハゾーン）が考えられます。集落を取り囲む森林を一定の幅で伐採し、下刈りを行い見通しを良くし野生動物が近づきづらい環境をつくり、被害を未然に防ぎます。

野生動物が住む豊かな自然環境は大切な財産です。その自然環境を（生息域）を破壊したのは私たち人間です。山に実のなる木を植え本来の豊かな自然環境を取り戻すことが、現代を生きる私たちの使命でもあり「共生」「棲み分け」にも大きくつながります。

棲み分けを確立するには永い年月がかかると思いますが、きちんと出来れば、その生息域で得られるエネルギー分しか生存できませんから、結果として個体数は一定数以上増えることはなくなり

ます。見方を変えると野生の保護につながります。

○獣害対策には、「これで完全」という特効薬はありませんが、野生動物と人の生活域との棲み分けを真剣に考えるべき時が来ている様に思います。

（写真Ⅱ整備された緩衝帯、一部では羊の放牧もされている。いずれも東近江市にて）

三重県では、平成22年度から毎年9月を「野生鳥獣による農林水産物への被害について考える月間」と定め、被害状況や対策等の現状や被害対策の重要性を考えるフォーラムが、毎年開催されています。

24年度は、9月10日、伊勢安土桃山文化村において開催され、名張市からは、MD関係、猟友会、行政から16名が参加しています。

近年、三重県内では野生鳥獣による農林水産物への被害が増加の一途をたどっており、これらの被害により生産を続ける意欲を失い、地域のよつては耕作放棄地が拡大し深刻な状態になっていきます。

こんな状況下開催された今回のフォーラムには300人超が参加されて、その関心の深さを伺え知る

野生獣による農林水産物への被害について考える月間



取り組みについて

○三重県農作物被害金額

平成22年度

サル（全国2位）

1億2,090万円

シカ（全国7位）

1億2,242万円

イノシシ（全国13位）

1億9,424万円

○狩猟、有害捕獲における規制緩和

シカの捕獲数について、銃による1人1日当たりの捕獲数の上限を無制限にするなど。大幅な規制緩和がなされています。

捕獲獣は食材として利用されているケースは少なく、適正に捕獲し有効活用を奨励しています。

「ミューゼ ボンヴィヴァン」のシェフも「駆除された鳥獣の有効利用は料理人の役目である」とも言われています。

○平成24年度事業の主な取り組み

- ・獣肉の利活用。
- ・有害鳥獣捕獲体制の強化。
- ・被害に強い集落づくり。
- ・外来種（アライグマ）捕獲技術の開発。
- ・野生獣の棲みやすい森林づくり。
- ・更新伐による奥山の森林再生。
- ・強度伐採による奥山の緩衝林整備。

○獣害対策五箇条

1 集落内の「収穫残さ」や不要果樹など餌場をなくす。

2 耕作放棄地や藪などの隠れ場をなくす。

3 囲える畑はネットや柵のできる限り囲う。

4 人里は怖いと覚えさせるため、獣を見たら追いかう。

5 有害な野生鳥獣を適正

これでは林家の意欲は薄れ、植林後の手入れがされないばかりでなく、植林自体もままならない状況。植林したとしても獣害対策のコストが重くのしかかる。今のままでは、将来の木材資源の確保、多面的機能の発揮、地域環境の維持が困難。林業は50年、100年と息の長い産業だからと言って今までの繰り返しではダメ。施業体系、生産、販売体制の見直し・改善が必要。

「森林における被害状況および対策について」

植林から30年間の育林で補助金を活用しても1町歩あたり100万円の自己負担。木材価格は下降の一途で皆伐時の手取りが1町歩あたり100万円。1本当たり1000円以下。

「今後の獣害対策の」

○平成24年度事業の主な取り組み

- ・獣肉の利活用。
- ・有害鳥獣捕獲体制の強化。
- ・被害に強い集落づくり。
- ・外来種（アライグマ）捕獲技術の開発。
- ・野生獣の棲みやすい森林づくり。
- ・更新伐による奥山の森林再生。
- ・強度伐採による奥山の緩衝林整備。

○獣害対策五箇条

1 集落内の「収穫残さ」や不要果樹など餌場をなくす。

2 耕作放棄地や藪などの隠れ場をなくす。

3 囲える畑はネットや柵のできる限り囲う。

4 人里は怖いと覚えさせるため、獣を見たら追いかう。

5 有害な野生鳥獣を適正

「人と野生獣との共存について」

生物多様性

■生物多様性とは？

全ての生物の間に違い（変異）があること。

「生態系や地球上に様々な種、多様な生き物が存在していること」。

■3つのレベルの生物多様性。

- 1 生態系の多様性
- ※農業の生態系、森林の生態系、海洋の生態系等、様々な生態系が存在する。
- 2 種の多様性
- ※様々な種類の動物、植物等が生息・生育していること。
- 3 遺伝子の多様性。
- ※同じ種のなかでも、個体ごとに遺伝子が様々である。

■全ての生物の生存基盤。

※大気、水、土壌及び生物などの間を物質が循環し、生態系が精妙な均衡を保つことによつてはじめて成り立っている環境は、人類を含む地球上のすべての生物の存続の基盤である。

■生物多様性が減少。

※生態系のバランスが崩れる。害虫の大発生など

に捕獲する。

三重県 主な野生獣の捕獲数

	H17年度	H21年度	H22年度
イノシシ	5,111	7,434	11,119
シカ	5,730	10,979	15,393
サル	490	1,064	1,353
合計	11,331	19,477	27,865